

額田王の「宇治の都の借廬」詠について

廣岡義隆

【キーワード】

万葉七番歌・額田王・宇治の都・風土記・宇治天皇………主要五項
ワニ氏の伝承・大王説話・仁徳天皇・聖帝・諸説表現………二次五項

【要旨】

額田王の最初期の作として知られる『萬葉集』に収められた「宇治の都の借廬」詠（巻1・七番歌）の背景について考察し、ついで、この作の表現意図に迫ろうとするものである。

従来、『古事記』『日本書紀』に記された歴史観に基づいて、ウヂノワキ郎子とオホサザキノ尊との皇位を譲り合う美談が展開され（空位三載）、ウヂノワキ郎子の逝去で以ってオホサザキノ尊の即位が実現し、ここに聖帝仁徳が成立するとされてきた。しかしながら、『山背国風土記』（逸文）等に見られる記述を分析すると、史実は別として、少なくとも説話としての宇治天皇の存在が明らかとなってくる。即ち、宇治の地にウヂノワキ郎子は宮室「桐原日桁宮」を持ち、そこが都と称されていた。こうした宇治大王説話を背景として、額田王の「宇治の都の借廬」詠は作られていると考えられる。

このように見て初めて、額田王の歌詠における「宇治の都」という表現の意図するところが明らかとなってくる。これまで、「宇治の都」とは、単なる行旅における宇治での行宮の称であると理解されてきたが、ここに「宇治の都」とは文字通り宇治大王の皇居の存した故地の称となってくる。と共に、「宇治の都の借廬」と表現さ

れたその表現意図も明確となる。即ち、雅としての「都」の表現と、その対極に位置する「草葺きの借廬」という表現の落差が奏でる響きをも含ませた歌であることが浮き彫りとなってくるのである。

一 はじめに

『萬葉集』巻第一の「明日香川原宮御宇天皇代 天豐財重日足姫天皇」の標目の下に、次の作がある。

額田王歌 未詳

金野乃 美草葺葺 屋杼礼里之 兔道乃宮子能 借五百磯所念

（1・7）

右、檢「山上憶良大夫『類聚歌林』」曰、「一書、戊申年、「幸比良宮」大御歌」。

但、紀曰、「五年春正月己卯朔辛巳、天皇幸自紀溫湯」。三月戊寅朔、天皇幸吉野宮而肆宴焉。庚辰日、天皇幸近江之平浦」。

この歌の作者については、「題詞」によって額田王であると見るのか、それとも「左注」が示す『類聚歌林』の「大御歌」によって天皇であると見るのか、問題がないわけではない。題詞に書き込まれた「未詳」の

文字はこうした作者に関する問題点に関わって後に補記されたものである。⁽¹⁾これについて、形式作者（天皇）と実作者（額田王）という最近の一般的な解釈に従い、当歌の実作者を額田王と見て以下の考察を進めて行く。⁽²⁾

二 当該作品の詠作時

さてまず、その形式作者としての「天皇」とは何天皇であり、その作歌時は何時であるのか、検討しておく必要がある。

当歌の標目には「明日香川原宮御宇天皇代」とあり、何時の書き込みであるのかはわからないが、その標目下に「天豐財重日足姫天皇」とある。明日香川原宮御宇天皇（天豐財重日足姫天皇）とは齊明天皇のことであるが、次の八番歌の標目が「後岡本宮御宇天皇代」とあり、後岡本宮御宇天皇も齊明天皇のことであるので、巻第一の皇位順による配列から見て、『萬葉代匠記』（精撰本）が指摘する様に、巻第一の編者は同一人物ながら皇極天皇として標置していると見るのがよい。

ところが、その左注の『類聚歌林』が引く「一書」によると、「戊申年幸比良宮大御歌」となり、戊申年とは六四八年（大化四年）、即ち孝徳天皇代ということになる。同じ左注が引く『日本書紀』によると、齊明天皇五年（六五）三月庚辰日（三日）の「幸近江之平浦」の時のこととなるが、当該歌の初句「金野」（『秋の野』）の表現に季節が合致せず、この齊明五年三月の行幸に関わる歌でないことは明らかである。左注の「一書」の「戊申年」によるべきか、標目によるべきか、むづかしいところである。今は年代の下がった方の「戊申年」説によっておく。戊申年（大化四年、癸卯）の秋は『日本書紀』に行幸記事が欠けている。記事が欠けているから

合致するとは云えないが、少なくとも季節上の不整合はない。⁽³⁾

即ち、この歌に見られる行幸を孝徳天皇代の大化四年秋の比良宮行と想定しておく。額田王の年齢は判然としないが、その娘の十市皇女や孫の葛野王の存在から、次のように推定されている。即ち大化四年（癸卯）の時点において、十八〜十九歳（中島光風氏）、十三〜十四歳（花田比露思氏）、十歳（尾山篤二郎氏）などと幅がある。⁽⁴⁾

この大化四年秋の比良宮行については、かつて、

或いは、位を孝徳天皇に譲った後の皇極上皇に従った近江行ではなかったか、そういう事情が『萬葉集』に皇極天皇代という標目を立てさせたのではなかったか、などと思考するものである。⁽⁵⁾

と考察したことがある。孝徳天皇の行幸は、『日本書紀』で見える限り、有間温湯への行幸（大化三年）以外は、子代離宮など難波宮周辺へのものに限られており、近江国への行幸の記録がない。時は孝徳天皇代であっても、位を譲った前天皇である皇極上皇の「行幸」に従っての道行の可能性を考慮すべきであろう。その途上の宇治の都を回想しての額田王の作ということになる。

右の行幸時の推定は、あくまで行幸従駕の時についての考察であり、この歌自体は結句に「念ほゆ」と表現されている通りの回想詠であり、その行幸を回想して作歌した時は何時のことであるのか、明確でない。額田王の年齢推定について、十〜十九歳と幅があることを記したが、そのいずれであっても、無理はない。これは行幸従駕時期であって、作歌時期ではないからである。皇極上皇に慈しまれた額田王を思うと若年での従駕もあり得る。年齢は未詳であり、参考のために諸説を記したに過ぎない。ではあるが、「額田王歌稿」において、歌稿の冒頭部に位置する作であり、作歌年次こそ何時とは断定出来ないものの、額田王の作歌

史上早い内に属する作である。ただしこれは推定の域を出ず、厳密には作歌年次不明とすべきものである⁽¹⁰⁾。

或いは、斉明天皇崩御（癸二）後に、皇極（齊明）天皇を追慕しての作である可能性もあり、また近江遷都（癸七）に関わって宇治の地を再び踏んだ時の作の可能性も否定しきれない。斉明天皇の崩御は秋七月で、九州の朝倉宮でのことである。「遷都于近江」と『日本書紀』に出るのは三月のことであるが、「京都之風向近江移」とあるのは前年の「是冬」条である。このような場合、額田王は、回想した時点ではなくその対象時点に合わせて「額田王歌稿」の冒頭に位置させたということになるのか。もしそうであれば、この歌稿資料を入手した原萬葉編者・『萬葉集』巻第一編者は、その歌稿資料を無批判に受け入れて標目を設定したということになってくる。

右のように考えると、この作の詠作時は、全く不明ということになってくる。

三 宇治の都 —— 従来の説 ——

次に、この歌の第四句に見られる「菟道の宮子」（宇治の都）について、どのように理解するのがよいのか。従来の解釈は、次の三通りに分類出来る。

* 宇治での行宮の呼称。〔A説〕

* かつて皇太子宇治若郎子の宮（居所）があった所。〔B説〕

* 行宮の呼称であり、かつ宇治若郎子の居所があった所。〔C説〕

最初のものを〔A説〕、次のものを〔B説〕とすると、第三に位置する〔C説〕は〔A+Bの説〕ということになる。まずはこの〔A説〕か

ら見て行こう。

A 〔宇治での行宮の呼称〕

・又ウチノミヤコト者行宮也。非京都也。可分別之。

（仙覚『萬葉集註釈』時雨亭本）

・うちの都は、行宮なり。

（下河辺長流『萬葉集管見』）

・菟道稚郎子皇子の、大宮をたてゝ、住せたまふゆへに、今も宇治の都とよめるとおもへるは非なり。後の人のうちの都とよめるは、それにても侍るへし。今は行宮につきてよめり。

（契沖『萬葉代匠記』初校本）

・幸の時、山城の宇治に造りたる行宮をいふ、さて離宮所をも行宮所をも略きてはみやこといへり、

（賀茂眞淵『萬葉考』）

・うぢのみやは、幸の時山城の宇治に造られたる行宮をいふ、

（加藤千陰『萬葉集略解』）

・行幸の行宮を指して宮所とはよみしなり。菟道は山城の宇治にて行幸の路次なれど、宇治に都宮のありし事はなし。

（橘守部『萬葉集檜婦手』）

・たゞ一夜にても、天皇の大ましくし處は、都といふべし。

（富士谷御杖『萬葉集燈』）

・山城國宇治郡に造らしたる行宮所の地を云、

（鹿持雅澄『萬葉集古義』）

・菟道乃宮子は山城の宇治にて、古大和より近江への路次なりしかば近江へ幸の時、此所に行宮を造らせ給ひしによりて都とはいふなり、行宮を都といひしは、卷六十五に難波へ幸の時の歌に荒野等丹里者雖有大王之敷座時者京師跡成宿、など猶あり、

（木村正辞『萬葉集美夫君志』卷一上）

・宮子は宮處で、一日又は数日の行在所も亦ミヤコである。

（鴻巣『全釈』）

・宮子は京の義。行宮にても皇居のある處、これをミヤコといふ。

「瀧之宮子波 見礼跡不飽可聞」（卷一・三六）の宮子は、吉野の離宮を称してゐる。

（武田『全註釈』）

・天皇が或る地に宿を取って留まれば、その限りその場所をも「みやこ」という。宇治は大和から近江への通路にあたり、記紀万葉にしばしば見える。近江方面への代々の行幸時に、天皇が宿る一定の地があったと思われる。

（伊藤『全注』）

・ここは近江行幸の途中仮泊した行宮。その跡は宇治市下居（おりの）の下居神社付近かと言ひ伝える。

（新編日本古典文学全集本『萬葉集』）

右は列挙し過ぎたきらいがあるが、古くよりなされて来た通解を確認するために挙げたものである。行宮説と総括しても、武田『全註釈』などのように離宮の性格まで含める考えなど概念のふくらんでいるものもある。Aの行宮の解は他に、『井上新考』、『山田講義』、『総釈』（武田祐吉担当）、『菊池精考』、『金子評釈』、『窪田評釈』、『佐佐木評釈』、『全集本』、『原田点晴』、『集成』、『完訳』、『釈注』などと掲げることが出来る。ついで「B説」を見よう。

B 「皇太子宇治若郎子の宮（居所）があった所」

・さて、この宇道の都に、三つの説あり。其一つは宇治に行幸ありし事、…中略…宇治にも立よらせ給ひし行宮（かり）のありし所を、宇治の都とはいへるか。…中略…其二つは、菟道若郎子のおはしましゝかば、しかいふか。…中略…其三つは、天皇皇子などおはしまさずとも、たゞにぎはしき所を都とはいふか。…下略…

（岸本由豆流『萬葉集攷證』）

・宇治の都は宇治若郎子の宮のあった所で、卷九には宇治若郎子宮所歌といふ題詞（一七九五）もある。之を行幸の行宮が出来たからミヤコと呼ぶといふ説は取らない。

（土屋『私注』）

岸本由豆流の『萬葉集攷證』は、まずA説を掲げ、ついでB説を挙げ、三番目にA・B・C以外の「たゞにぎはしき所」と推考している。この「たゞにぎはしき所」は古用法ではないので説として挙げることを棄却する。以上は考えを列挙しているのみであり、その後に賀茂真淵の『考』を引いて「幸の時、山城の宇治に造りたる行宮（かり）をいふ」としており、『攷證』の説としてはB説というよりもむしろA説と見るべきであろう。ただ、他が挙げてはいないB説を掲げているので、このB説の箇所を示した。よって、このB説の解はわずかに土屋文明氏の『私注』の一件のみであるとしてよいであろう。

これらA・Bの両説を採用したものが第三の解（C）であり、最初に取り上げた増訂本『全註釈』は、恐らく『私注』の解を勘案しての増注であろう。澤瀉久孝氏の『注釈』は、前年に出た増訂本『全註釈』を参考にしたものと思われ、『注釈』よりも前に出ている澤瀉氏の『新釈』では七番歌は参照歌として挙がっているだけであり、注解はなされていない。

C 「行宮の呼称であり、かつ宇治若郎子の居所があった所」

・『全註釈』のA説の文章の後に「宇治は、宇治の稚郎子（わきいらこ）が、宮作りしておられた地であるから、それでミヤコというかもしれない。

（武田『増訂全註釈』）

・「みやこ」は行宮のあるところであり、皇居でなくとも、さるべき宮などあつて人々の集つたところを呼んだものと思はれる。宇

治は大和から近江への通路であり、仁徳紀（即位前紀）に「興宮室於菟道而居之」とあるやうに菟道稚郎子が皇太子として居られたところであるから「みやこ」と云ったものであらう。

（澤瀉『注釈』）

・京というのは、昔菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）がおり、行宮もあつたゆえであらう。
（中西『全訳注』）

以上、「宇治の都」についての現今の解は、

*〔A〕宇治での行宮の呼称。

*〔B〕かつて皇太子宇治若郎子の宮（居所）があつた所。

*〔C〕行宮の呼称であり、かつ宇治若郎子の居所があつた所。

〔A+B〕

の三説に分けられる。

四 『古事記』『日本書紀』による仁徳像の形成

『日本書紀』とは一つの書物に過ぎず、そこで展開されている歴史理解は一つの言説に過ぎない。『古事記』の説くところと、『日本書紀』の説くところを合理化し合一化しないのがよいというのも最近の到達点である。⁽¹¹⁾ところが、右で見て来た『萬葉集』の「宇治の都」の解は、『古事記』や『日本書紀』が説くウヂノワキ郎子像になおよりかかっているところが大きいと言えよう。

『日本書紀』で見てみよう。『日本書紀』には応神天皇の子女として、十皇子九皇女を挙げるが（応神天皇二年立后条）、その中で、大山守皇子・大鷦鷯尊・菟道稚郎子の三皇子の皇位をめぐる話が出てくる（仁徳即位前紀）。大山守皇子は「我殺太子、遂登帝位」と図ることによって、菟

道河で破れ逝去している。ここに「太子」と記されているのは菟道稚郎子のことで、応神天皇四十年条に立嗣が記されている。太子の呼称は恐らく後の『日本書紀』編纂時の筆であらう。その後、「空位三載」という大鷦鷯と菟道稚郎子とが皇位を譲り合う美談が展開され、「乃自死焉」という菟道稚郎子の結末で終止し、大鷦鷯天皇が実現している。

『古事記』と『日本書紀』と、その叙述は類同してはいるが、『古事記』の説話は簡潔であり、一方『日本書紀』の方は詳しく展開している。その結末が『古事記』では、「然、宇遲能和紀郎子者、早崩。故、大雀命、治天下也。」（応神記条）となっていて、自然死として描かれるのみならず「崩」とあって（後述）、説話の原姿を髣髴とさせている。これについては、土橋寛氏が歌謡展開の面から、和珥氏の伝承（後述）が『日本書紀』においては崩壊していると指摘している。⁽¹²⁾

『応神紀』二年立后条に見られる皇子女一覧によると、大鷦鷯天皇は応神天皇の皇后仲姫の一子二女の中の一子であり、大山守皇子はその仲姫の姉である応神天皇の妃高城入姫の三子二女の中の一子として出、一方菟道稚郎子は応神天皇の第三の妃である日触使主（和珥臣が祖）の女、宮主宅媛（『古事記』では「宮主矢河枝比売」の称）の一子二女の中の一子として出てくる。『日本書紀』には、仲姫や高城入姫の父祖について明らかにされていないが、仲姫が皇后と記され、高城入姫は第一妃であり、また仲姫の妹の弟姫が第二妃となっている。皇后と第一・二の妃を出している家系であることがわかる。また『古事記』を見ると、中日売命と高木之入日売命・弟日売命の三女は五百木之入日子命の孫、品陀真若王の女としてあり、景行天皇の曾孫ということになっている（景行記・応神記）。『古事記』の系譜を援用するまでもなく、皇后と第一・二の妃を出しているというだけで自ずと宮廷における位置付けは明らかである

（ただし『古事記』は后妃の別を記していない）。一方、菟道稚郎子はワニ氏（和珥氏・丸邇氏）の祖とされる氏族に連なり、中央有力氏族ではあるが、皇位継承という点では、大鷦鷯尊や大山守皇子よりも距離があるものである。にも関わらず、『日本書紀』で太子とされているのは、その底にワニ氏による大王伝承が存したものと考察されるが、それを利用して皇位を譲り合うという美談説話の重要なプロットとして設定し、後の「仁徳像」を形成するための編纂時の細工として置かれたものと考えられる。このウヂノワキ郎子太子譚は、説話としては、「太子」にとどまらず、ウヂノワキ郎子が大王として即位していたと思われる形跡がある⁽¹⁵⁾。

五 山背国風土記逸文

由阿（ニユ）没年未詳）が著わした『萬葉集』に関する考証注解の書『詞林采葉抄』の中に「宇治都」条がある。七番歌に見られる「菟道ノ都」について、「山城ノ宇治ト可心得哉。將又比良浦ニ在之哉。」という「問」に、「答云」として、仁徳即位前紀等を引きつつ考証し、最後に「山城国風土記曰」として、

謂ニ宇治ト者、輕嶋明宮ノ御宇天皇之子宇治若郎子造ニ桐原日桁宮一以爲ニ宮室ニ。因御名號ニ宇治ト。本名ハ曰ニ許乃国^{カルシマアカリノミヤ}矣。
 （藤波本『詞林采葉抄』第一）

を出して「彼是宇治都無相違者乎。」と「比良浦」案を打ち消して「山城宇治」案を可としているものである。ここに、散逸した『山背国

風土記』の断片を逸文として拾うことが出来る。

この逸文「宇治」条について、かつて次のように記したことがある⁽¹⁷⁾。他の上代文献には見られない独自の説話伝承等が風土記逸文にも少なくない。また説話伝承ではない独自の事項も数多い。そうした中で、特に注意したい例を以下瞥見しよう。

宇治若郎子に関する小話を載せる「宇治」条（山背国風土記）には、「桐原日桁宮」「宮室」とあり、記紀伝承とは異なる「宇治天皇」としての側面を照射する。五風土記中の播磨国風土記の揖保郡上宮岡条に「宇治天皇」の称がある。天皇号成立以前のことではあるが、中央で形成された皇統とは異なる系譜理解として注意してよい。

この言及に関わって、『風土記逸文注釈』における語釈項目「桐原日桁宮」「宮室」と「諸問題」の関係個所でのかつての言及⁽¹⁸⁾を改めて引いておこう。

桐原日桁宮——『仁徳紀』には「菟道宮」（即位前紀条）とある。「桐原日桁」は他に見えない。その名が何に由来するか不明。或いは「日桁」は、「引田」か「檜桁」か。ここに「宮」の呼称を使い、「宮室」（次項）とするのは、宇治天皇の伝承によるものか。額田王の歌にも、「菟道乃宮子」（『万葉』巻一・七番歌）とある。また「宇治若郎子宮所歌一首」の題で「妹らが今木の嶺に茂り立つ婦待つ木は古人見けむ」（『万葉』巻九・一七九五番歌、柿本朝臣人麻呂之歌集・挽歌部）ともある。…下略…。

（「桐原日桁宮」条、一一八頁）

宮室——「宮室」は『紀』に十八例、『統紀』に七例あり、天皇の大宮あるいはそれに準じた行宮の称として使用されている。『神武紀』即位前紀己未年三月条、『景行紀』十二年冬十月条、『仲哀紀』

二年九月条、『仁徳紀』七年九月条、同十年冬十月条（二例）、同三十年九月条、『允恭紀』八年二月条、『元明紀』和銅元年二月条等々がそれらの例である。『仁徳紀』即位前紀条の「宮室」例は菟道稚郎子に關しての使用例である。また、皇太子ではあるが摂政として政務を行った聖徳太子の場合に「宮室」の語が使用されている（『推古紀』九年春二月条）。この二例以外には、皇太子の宮として「宮室」の語が使用されている例はない。…下略…

〔宮室〕条、一一八頁

諸問題——「桐原日柝宮」の宮号及び「宮室」の称の使用は「宇治天皇」としての側面を照射する。吉井巖氏は応神の非實在性と共に、その三皇子の物語性（皇位継承主題を展開するための構想としての物語）を説く（『応神天皇の周辺』¹⁹）。こういう非實在の物語的性格は、その伝承像の新たな展開を内包し、「宇治天皇」という伝承説話の形成も不可能ではないこととして把握することができる。

〔諸問題（二）「桐原日柝宮」「宮室」について〕条、一一九頁

『播磨国風土記』に出てくるのは呼称としての「宇治天皇」だけである。これだけであれば、天皇号成立以前の段階のものであり、『常陸国風土記』における「倭武天皇」と同レベルの表現との理解も出来よう。また『山背国風土記』の「宇治」条には「宇治天皇」の称は見られない。しかしながら、『山背国風土記』（逸文）には、宇治若郎子の背後に、「桐原日柝宮」「宮室」とあり、その語彙から宇治天皇説話が色濃く揺曳する。『完訳萬葉集』は巻九の一七九五番歌条で「宇治若郎子」について次のように言及している。²⁰

応神天皇の皇子。母は日触使主の娘、宮主宅媛。仁徳天皇（大鷦鷯皇子）の異母弟。山背国宇治の宮に住んだので「菟道稚郎子」とい

い、『古事記』には「宇遲能和紀郎子」とも記す。百済の博士王仁に典籍を学び、大いに通達した、とある。応神天皇はその才を愛して皇太子とし、大鷦鷯皇子をその補佐に任じたが、天皇の崩後互いに皇位を譲り合い、ついに若郎子が自殺したという説話は記紀に詳しい。『播磨風土記』に「宇治天皇」と記していることは、『古事記』がその死を「早崩」とし、天皇の崩御に準ずる扱いにしていることと共に注目し値する。

として、『古事記』における「崩」字の使用に言及している。また芳賀紀雄氏は、『播磨国風土記』の「宇治天皇」とこの『古事記』の「崩」の例を挙げ、

菟道稚郎子が即位していた可能性を示唆するもの……
と言及する。²¹ 共に貴重な指摘である。

六 説話としての宇治天皇

額田王が七番歌を詠作した時点では、まだ『古事記』も『日本書紀』も編纂されていない。そうした本にまとめられる以前の段階の伝承説話が存在したのである。即ち、ウヂノワキ郎子の大王説話は生きた説話として人から人へ語り伝えられていた。

巻第九の「挽歌」部冒頭に位置する人麻呂歌集歌、

宇治若郎子宮所歌一首
妹等許 今木乃嶺 茂立 婦待木者 古人見祁牟（9・一七九五）

この歌の題詞には「宮所」とある。即ち、かつて宮があった所²²に関わっ

ての感懐を抱いての詠である。この柿本人麻呂歌集歌の時点においても、ウヂノワキ大王説話は、語り伝えられ命脈を保っていた説話であった。「語り継ぎ言ひ継ぐ」ことが永遠性を保持していた時代である。

永遠性が確信されていた説話が、『古事記』『日本書紀』という編纂物によって変改されてしまった。これはウヂノワキ郎子説話に限ったことではなく、家々が伝えていた神聖にして犯すべからざる伝承は、天皇家の権威の下に、その多くは大きく歪曲されてしまったことであろう。当初はそうした文字によって記された書はなお軽く見られ、家々では家伝や氏文の類がなお口誦で高らかに語り継ぎ言ひ継がれていたに違いない。さて、私がウヂノワキ大王説話と命名した、その即位レベルまでは言及されていないが、歴史学において、「応神記」における

大山守命、為「山海之政」。大雀命、執「食国之政」以白賜。宇遲能
紀郎子、所知「天津日繼」也。

の一文について、これは『旧辞』中に古くから存在した分掌物語であり、この「応神記」三皇子分掌の話が「神代記」の三貴子分治の説話へ転化したものであるとする指摘が岡田精司氏によってなされている。⁽²³⁾ これを受けて、黒沢幸三氏は、右の「応神記」三皇子分掌の一文は史実を伝えているものではないが、宇治の地には『古事記』『日本書紀』とは無関係に古くからウヂノワキ郎子伝承があり、これは「宇治に拠点をもっていたワニ氏が語り伝えた伝説的皇子である」としている。⁽²⁴⁾ ワニ氏（和珥氏・丸邇氏）が語り伝えた氏族伝承説話に相違はないが、私はその説話の底に何らかのワニ氏側とオホサザキ側との拮抗が存在したものである⁽²⁵⁾と推測する。かくして、ワニ氏側では即位したウヂノワキ大王とし

ての説話が語り伝えられていたものであろう。しかし、この伝承説話は『古事記』や『日本書紀』においては、聖帝「仁徳」を形成するためにのみ利用され、歪曲されたのであった。なお、ワニ氏の伝承が『古事記』に取り込まれる経緯に関し、『古事記』の記定にワニ氏が関与していたという想定説がある。⁽²⁶⁾ また、土橋寛氏は記歌謡四二番を素材に考究し、記歌謡四二番の物語は和珥（丸邇）氏の語部による制作とその伝承であり、それが応神天皇と矢河枝姫（ウヂノワキ郎子の母）の婚姻物語として「応神記」に取り込まれたとしている。⁽²⁷⁾

その後、時の流れは明確に口誦信仰から記載主義へと推移していった。何事も文字によって記された文献によって実証するという文献主義、これは恐らく史生（書記）の職務を、当初、渡来人に頼ったところに由来するものであろう。加うるに、官僚社会は文筆を重んじ、文献に基づく規範と文筆による伝達とを第一とした。

家伝や氏文すら文に記され、家々の系譜すら文字によって刻されたり、記されるようになっていった。

『萬葉集』の原型の成立は何時と断定し難いものがあるが、巻第一や巻第二が「原萬葉」からより整備されて現今の姿に近くなった段階では、「右検日本書紀」（1・六左注）、「紀曰」（1・二二左注）、「右案日本書紀」（1・二四左注）、「日本紀曰」（1・三四左注）、「右日本紀曰」（1・三九左注）などがあり、「検日本紀曰」（2・九〇左注）、「紀曰」（2・一五八左注）、「右日本紀曰」（2・一九三左注）、「日本紀云」（2・一九五左注）などと記されていて、『日本書紀』による検証がなされている。ここには正史としての『日本書紀』の権威に基づく「事実確認」を行うという編者の姿勢が確認できる。

官僚というフィルターを通過した古代日本においては、家々の伝承よ

りも、文字に記され公布されている正史というものが、絶大な権力を背に揺るがせに出来ないものとして存在し、もはやそれに疑問を差し挟むことすら許されてはいなかった。

かくして、『日本書紀』史実観は形成され、醸成されていった。

しかしその成立の原初の位置に立って考えてみると、『日本書紀』が記していることは一つの主張であり、それはこのウヂノワキ郎子条についても同様の状況であることに思いを致す必要がある。

七 むすび — 都の借廬

額田王が、「金野乃美草菰屋杼礼里之兔道乃宮子能借五百磯所念」(1・七)と詠んだ時、その「兔道乃宮子」とは、『日本書紀』以前の伝承説話としてのウヂノワキ大王説話が存在し、結果、宮室をもった都が宇治の地に存在したと信じられていた。そういう旧都としての宇治が、真偽は別として、人々に広く知られていての詠歌であるという認識を持つ必要がある。

後の作品になるが、『伊勢物語』の流布本における初段は、初冠りしたばかりの男が旧都平城の春日の里を訪ね、そこに「いとなまめいたる」姉妹を見初めるという著名な初恋章段である。そこには、狩をする荒蕪地春日の里(旧都)に、若く初々しい雅やかな姉妹を見出し、そのアンバランスな存在を「はしたなし」と形容している。それに近い額田王のある種の諧謔的表現がこの歌には認められるのである。

現在は旧都として荒れ果てているには相違ないが、その地は伝承による限り、かつては王宮の存した宮所である。しかも近江への行路としては丁度中間地点に位置し、旅宿りに最適であり、行幸の行宮が造られる

のも故あることである。

かくて、折から秋の「み草」の薄を刈り取って屋根が葺かれた行宮が造られていた。歌の表現としては額田王自身が屋根を葺いたかのようになっているが、行幸を前に、事前に行宮は造られていたはずである。立派な行宮と言っても俄か造りの廬である。それを額田王は「借五百」(借廬)と表現している。

かつての王宮(宮室)の存した王都と、現在の草葺の借廬(仮庵)とのアンバランス、その不釣り合いなおかしさを額田王は「兔道乃宮子能借五百」(宇治の都の借廬)と表現したのである。これについて、身崎壽氏は、

「仮廬」と「宇治の宮処」——このふたつの、ある意味では対照的なイメージをもつ要素をむすびつけた発想が、宮廷人の感興をもよおしたものでないだろうか。

と言及している。留意してよい発言である。ただ従来は「宮子」と言っても言語表現上のものにすぎず、その指すところは行宮であると多くは理解して来た(当稿三のA説)。B説においても太子の居所と考えるものであり、C説はA説にB説を併記したものであった。しかし、以上の考察によって、「宮子」とは説話上、王都(旧都)と理解されていたものであり、その王都と借廬の対比表現を額田王は歌の上で示していると思われるのがよいことが明らかとなってきた。

この歌は、かつての行幸に従っての行旅を回想しての詠歌であり、囁目詠ではない。思い出している回想詠において、額田王はこうした一種の諧謔の響きをも表現として含ませていることを確認したい。当歌はこの余裕をもった回想詠であり、世はそうした表現を歌詠として認める段階にまで達していたことを確認したい。

注

(1)、「未詳」については、作歌年代に關しての注記とされる場合が多いが、作者名の下に録されており、歌の詠作者は題詞と左注とで説くところが異なっていて、梶川信行氏が「額田王の歌」とある題詞内容に關しての注記と理解した方が素直な読み方と指摘する通りである（梶川信行氏「額田王の胎動——八世紀の《初期万葉》から七世紀の《初期万葉》へ——」『美夫君志』五九号、一九九九年二月、二九頁。梶川信行氏「創られた万葉の歌人——額田王——」『塙書房』二〇〇〇年六月、八八頁）。

(2)、この実作者と形式作者との問題は実は単純ではない。かつて研究史を振り返って次のように総括したことがある（廣岡義隆「身崎壽氏著『額田王——万葉歌人の誕生——』」、北海道大学『国語国文研究』第一二二号、一九九九年七月、三六—三七頁。引用が長くなるが、重要であるので、再掲する。

『萬葉集』に十一作品（十二首、重複一首をカウントすると十三首）見られる額田王ほど、その歌人像が揺れる作者は珍しい。ここで私は、「作品」「歌人像」「作者」の語を使用した、そもそもそれらの用語自体に關して、問われ続けている。

伊藤左千夫（『萬葉集新釋』、『左千夫歌論集 卷二』所収、岩波書店、一九二九年）は額田王作とされる作品について、天智天皇と大海人皇子の三角關係の中で理解する。驚くほどの素朴さと評することは簡単であるが、当時はそれが一般的な理解であった。そういう「共通理解」の中において、新しい「読み」を提出してもなかなか承認されないものがある。

折口信夫の代作論も新しい「読み」の一つであった。「額田女王」と題するこの講演筆録に基づく稿（一九三五年、平成版『折口信夫全集』六、所収）は、「代作」という結論を述べるにとどまったものであったが、『萬葉集』採録の実態と共に、和歌作成における代作という現場への理解が折口にあったのことに違いない。しかし折口には一般に理解され難い独特の主張の数々

があり、代作論は論証抜きに展開されていることと相俟って、折口学信奉者以外への広がりを見せなかった。

この「代作」を論のレベルに引き上げ、『萬葉集』の題詞が認める作者と左注に録されている「類聚歌林」が伝える作者との齟齬を択一論ではない合理的解釈に仕上げたのは伊藤博氏であった（「代作の傾向」『国語国文』一九五七年二月）。伊藤氏は「代弁的歌人」と言い「御言持ち歌人」と言った（『萬葉集の歌人と作品 上』）。また中西進氏も発言する（『額田王論』『東京学芸大学研究報告』一九六二年二月）。中西氏は職掌としての「詞人」を主張した。こうして、折口信夫に発せられた代作としての見方は、論としての定着を見せてきた。

この代作論への批判は神野志隆光氏によって提起された（「中皇命と宇智野の歌」『萬葉集を学ぶ』第一集、一九七七年二月）。間人老による中皇命への代作（三・四番歌）という理解に対して、「歌の共有」が古代の実態であったとする。即ち「自分の歌がそのまま他者のうけいれるものであり、他者の歌をそのままうけいれて自己の歌とすることができる」（『柿本人麻呂研究』Iの「歌の「共有」一九九二年」という「共有」の場が古代和歌における実相であったと説く。ここに神野志隆光氏によって、代作論への疑義が提起され、我々は新たな段階に到達したのである。

額田王作歌論議は、素朴な理解の段階から、代作論へ、そして共有論へと展開してきた。弛まぬ考究の結果、新たな段階へと一歩また一歩と登ってきた観がある。

以上、長くなつたが、書評の冒頭部からの引用である。しかしながら、私はこの書評の中で、身崎壽氏の言う「古代的代作」を認めつつ、「額田王歌稿」（当稿注9）における能記の問題を提起し、歌人としての額田王を示唆したことがある。

なお加藤静雄氏は、「代作」論議を認めつつも、歌の主体という観点か

ら、次のように発言している。

「宇治のみやこの仮廬」に「宿った」ことを懐しく思い出している主体は、歌の作者である、と考えざるを得ないのである。

として、作者額田王自身の感懐を強く主張する（加藤静雄氏「万葉集巻一・七番歌存疑」『同朋大學論叢』六四・六五合併号、一九九一年六月、一三七頁）。一方、小川靖彦氏は歌中の助動詞「シ」の分析から、

秋の野の薄や萱を刈り、それからその草を屋根に葺き、そして完成した廬に宿った、ということになる一連の時間の幅のある動作が、動詞の連続という極めて圧縮されたかたちで表現されているのである。この動詞の連続は、秋の野での仮廬作りを生き生きと浮かび上がらせるとともに、それがある特定の個人の行為ではなく、宇治を訪れた一行の行為としてイメージさせよう。（二四頁）

とし、「思ほゆ」に視点を移して、
一行に共通の非日常的な旅宿りの体験を、後に生き生きと想起した歌と思われる。（二六頁）

としている（小川靖彦氏「秋の野のみ草刈り葺き宿れりし（万葉集一・七番歌）——助動詞シを中心に——」『国文学研究資料館紀要』二〇号、一九九四年三月）。いずれも肯うべき側面を指摘している。

共有体験をベースに回想・想起している主体は歌人額田王、その人である。その歌詠は同行の人々に共有されたことであろう。その歌を口にしたのは額田王であり、その歌が最初に記し留められたのは「額田王歌稿」であり、それが『万葉集』巻第一の原萬葉に録されたのである。

(3)、身崎壽氏「宇治のみやこのかりいほしおもほゆ——額田王の回想のうた——」（稿の会『稿』VI号、一九八八年二月）は、この間の経緯をより詳しく考究しているが、氏は斉明五年（六五五）の説に共感をおぼえるとしている。同氏は、右の稿を元に『額田王 万葉歌人の誕生』（塙書房、一九九八年九

月）の中においても同様の展開をし、大化四年（六四四）では額田王の他の作品から離れすぎることになり、斉明五年が無難としつつも、大化四年とされる背景など詳しく考究していて、聞くべきところが少なくない。

(4)、中島光風氏「額田王について——その御年齢測定を試み——」（『國語と國文學』第二巻二号、一九四四年二月）。

(5)、花田比露思氏「額田女王歌評釋」（『短歌講座』八、女流歌人篇、一九三三年四月）。「天智天皇崩御のとき、額田王の齡三十六七歳となり」（二二頁）。

(6)、尾山篤二郎氏「額田ノ姫王攷」（『萬葉集大成』九、作家研究篇上、一九五三年六月、「額田の出生は舒明十一年になり」（九四頁）。同氏『万葉と新古今』所収）。

(7)、その他、十十九歳の間に、谷馨氏、尾畑喜一郎氏、澤瀉久孝氏など、諸説が存在している。

(8)、廣岡義隆「額田王をめぐる」『蒲生野』二二号、一九八七年一月、四頁。

(9)、廣岡義隆「額田王歌稿の復元——天智挽歌群・十市皇女歌群をも視野に——」（『蒲生野』二五号、一九九三年二月）。

(10)、曾倉岑氏は、從駕した行幸から帰京後の宴での詠ではないかと推定している（曾倉岑氏「初期万葉における歌の「共有」をめぐる」『論集上代文学』第三冊、一九九八年三月、一〇頁）。

(11)、神野志隆光氏が一貫して力説するところである。神野志隆光氏「神話の思想史・覚書——「天皇神話」から「日本神話」へ——」（『萬葉集研究』三三集、一九九八年七月）及び、神野志隆光氏『古事記と日本書紀「天皇神話」の歴史』（講談社現代新書、一九九九年一月）。この論は同氏が古くより説き続けて来た点である。神野志隆光氏『古事記の世界観』（吉川弘文館、一九八六年六月）、神野志隆光氏『柿本人麻呂研究』（塙書房、一九九九年四月）、神野志隆光氏『古事記 天皇の世界の物語』（NHKブックス、日本放送出版協会、一九九五年九月）など。

(12)、土橋寛氏『古代歌謡全注釈 日本書紀編』（角川書店、一九七六年八月、

- (13)、岸俊男氏「ワニ氏に関する基礎的考察」（大阪歴史学会編『律令国家の基礎構造』一九六〇年一〇月、同氏『日本古代政治史研究』所収による。塙書房）。
- (14)、坂橋隆司氏は「末子相続」という観点から言及している。坂橋隆司氏「宇遅の和紀郎子物語考——末子相続譚を通して——」（國學院大學栃木短期大学紀要）二二号、一九六八年一月、日本文学研究資料叢書『古事記・日本書紀II』所収）。
- (15)、ウヂノワキ郎子は、史実として即位していたと言及するものも若干ある。中西進氏『大和の大王たち』（古事記をよむ³、角川書店、一九八六年一月、二二三頁）。呉哲男氏「ウヂノワキイラツコについて——日本書紀にみる「徳」の受容——」（『相模国文』二九号、二〇〇二年三月）など。そうした側面は大いに認められるが、本稿では説話レベルのこととして考察を進める。
- (16)、宮内庁書陵部蔵の藤波本『詞林采葉抄』は次の影印本によった。片桐洋一氏監修、ひめまつ会編著『詞林采葉抄』（大学堂書店、一九七七年三月、二四頁）。同本では一貫して「藤浪本」とするが、藤波本が正しいことについては、小倉慈司氏「書評と紹介・上代文献を読む会編『風土記逸文注釈』」（『日本歴史』六四六号、二〇〇二年三月）が指摘するところである。
- (17)、廣岡義隆「風土記逸文」（『風土記を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇一年八月、二五二頁）。
- (18)、廣岡義隆「宇治」（上代文献を読む会編『風土記逸文注釈』、翰林書房、二〇〇一年二月、引用は二一八頁・二一八頁・二一九頁）。
- (19)、吉井巖氏「應神天皇の周邊」（『天皇の系譜と神話——書き下ろし稿、塙書房一九六七年一月）。
- (20)、小島憲之氏・木下正俊氏・佐竹昭広氏校注・訳、完訳日本の古典4『萬葉集 三』（小学館、一九八四年一月、引用は巻九の一七九五番歌条、三八六、三八七頁、脚注二）。
- (21)、芳賀紀雄氏『万葉の歌 7 京都』（保育社、一九八六年一〇月、九二頁）。
- (22)、「宮所」について、古く「ミヤコ」と訓む見方も存したが、武田祐吉氏『全註釈』が「みやどころ」とし、窪田空穂氏『評釈』が「古く宮のあつた址としての稱」として以来、諸注もこれに従っている。その場所は種々言われていて比定は困難ながら、宇治上神社（世界遺産）ではその境内地を桐原日桁宮の旧跡と伝えている。この宇治上神社と隣接する宇治神社（宇治下神社）とは本来一体であり、このあたりがウヂノワキ大王の宮室のあった場所と想定されていた所であろう。即ち、ここが額田王によって「宇治の都」と詠まれた場所であり、人麻呂歌集歌に「宮所」とある場所であろう。この地は、飛鳥京・藤原京・平城京と近江等とを結ぶ行旅の際に、代々、行宮とされた所であり、また『源氏物語』宇治十帖において、「八の宮の山荘」として描かれた場所でもある（橋姫）帖）。
- (23)、岡田精司氏「大化前代の服属儀礼と新嘗」（『日本史研究』六〇・六一号、一九六二年五月・七月、同氏『古代王権の祭祀と神話』所収、塙書房、四二、四五頁）。
- (24)、黒沢幸三氏「大山守と宇遅能和紀郎子」（『同志社国文学』一一号、一九七六年二月、同氏『日本古代の伝承文学の研究』所収、塙書房、一一六―一二二頁）。
- (25)、菅野雅雄氏は「皇位争奪の生死をかけた闘いの存在を想定することは、強ち穿ち過ぎとはいいい難い」と指摘している。菅野雅雄氏「海人の涙——『古事記』における諺の手法——」（太田善磨先生追悼論文集『古事記・日本書紀論叢』一九九九年七月、同氏『古事記構造の研究』所収、おうふう、三四二頁）。
- (26)、川副武胤氏「古事記の成立に関する試論」（『古事記年報』一一、一九五二年八月、同氏『古事記の研究』所収、至文堂、改訂増補版による。一一三―一三四頁）。この川副氏の丸邇臣の関与説を発展させて、坂本太郎氏は、壬申の乱の功臣である和珥部君手や柿本人麻呂の関与を想定している（坂本太郎氏「古事記の成立」『古事記大成』四、所収、一九五六年二月、同氏『日本古代史の基礎的

研究』上、東京大学出版会、及び『坂本太郎著作集』第二巻、吉川弘文館、所収。

(27)、土橋寛氏「氏族傳承の形成 —— 「この蟹や何處の蟹」をめぐる——」

『澤瀉博士喜壽記念 萬葉學論叢』同論文集刊行會、一九六六年七月、二八七～三〇八頁、土橋寛論文集下『日本古代の呪縛と説話』所収。土橋寛氏は『古代歌謡全注釈 古事記編』(角川書店、一九七二年一月、一九五～一九六頁)においても論及している。

(28)、身崎壽氏「宇治のみやこのかりいほしおもほゆ —— 額田王の回想のうた——」(注3に同じ)。ただし、同氏の『額田王 万葉歌人の誕生』(注3に同じ)では、回想詠の文学史的考察の方に重点が移り、この指摘は消えている。